

ID 1008394

氷上で鍛える闘志は  
4年後の未来へ続く



1黄色のユニフォーム左から1番目が金子選手。

かほこ みきお  
金子 幹央 選手 プロフィール

今年3月に開催された「ミラノ・コルティノ2026冬季パラリンピック」に日本代表として出場した。  
令和7年度に市長特別賞を受賞。

今年3月に開催された、「ミラノ・コルティノ2026冬季パラリンピック」。本大会のパラアイスホッケー競技において、本市出身の金子幹央選手が日本代表として出場し、8位に入賞しました。

パラアイスホッケーは、下半身に障がいのある選手がそり状の「スレッジ」に乗って行うアイスホッケーです。両手に持つスティックで氷をこぎながら移動し、もう一方の面でパックを操作します。スピード感や激しいぶつかり合いなど、通常のアイスホッケーと同様の迫力が魅力で、チームワークや戦術も重要な競技です。

本大会の出場権は、世界選手権と最終予選を勝ち抜くことで獲得でき、日本勢として2大会ぶり、金子選手個人としては初出場となりました。「日本代表として出場することができて、とてもうれしかったです。特に、最終予選のシロバキア戦では、ぎりぎりまで逆転して勝つことができたので印象に残っている」とパラリンピック出場について振り返ります。

本大会の1カ月前、金子選手は右腕に力が入らず、日常生活に支障をきたす原因不明の体の不調に悩まされていきました。以前から違

和感がありながらも、大舞台を前にこれまで以上に激しく練習に打ち込んだ金子選手。「大会中は本来の力を発揮することができず、もどかしかった。4年間を通して、体力づくりをしていかなければいけないと痛感した」と悔しさをにじませます。

金子選手は、2018年に事故の影響で両足の太ももを切断しました。それまで本格的にスポーツに取り組んだことのなかった金子選手ですが、リハビリの一環で体を鍛えるようになり、バランス感覚を鍛えることのできるパラアイスホッケーを始めました。「パラアイスホッケーは、車いすバスケットやラグビーと違い、直接体と体をぶつけ合うことができるところが楽しい。幼い頃に、空手をやっていたので、体がぶつかる怖さを感じることなくプレーすることができている」とその魅力を語ります。

今後の目標について、「4年後にフランスで行われるパラリンピックでメダルを獲りたい。そのために、上位国との実戦で力をつけていきたい」と笑顔で語ります。氷上で鍛え上げた闘志を胸に抱く金子選手の、次なる挑戦と飛躍に大きな期待が集まります。